

聴覚障害児の指導における配慮事項

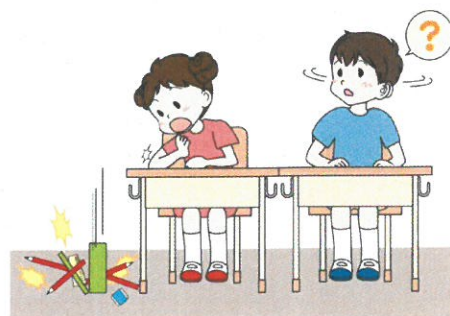
聴覚に障害のある子供たちにも、基本的には周りの子供たちと同じようにかかわればよいのですが、きこえにくさを補うための配慮を必要とします。

(1) 座席の位置を考えてください。

先生の顔がよく見えて声がきこえる位置がよいですが、最前列では先生の声はきこえても友達の声や周りの状況が分かりません。前から2～3番目で、きこえのよい方の耳が先生側になるような座席がよいでしょう。もしくは、合図や指示が出しやすい前の窓側付近（逆光になるのを防ぐことができる位置）がよいでしょう。

(2) 教室での大きな音に注意してください。

突然大声で呼びかけられたり、大きな音を出されたりすると、その言葉や音が分からないだけでなく、痛みとして感じたり、耳を痛めたりすることにもなりかねません。特に椅子や机を動かすときの物音には気を付けたいです。子供が何の音か分からずに不安そうにしているときは、何の音かを説明してあげましょう。



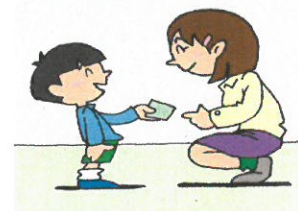
(3) 注意を引いてから話し掛けてください。

後ろから話し掛けても気付かないことがあります。軽く肩を叩くなどして、注意を引いてから話し掛けましょう。また、学級全体に話をする場合も、必ず注視を促してから話し始めましょう。



(4) 子どもの顔を見て話し掛けてください。

子供によっては話を聞くとき、聴覚だけではなく読話（口の形や口のまわりの筋肉の動きから言葉を理解する方法）を併用しています。話すときは子供がまぶしいと感じない位置で、顔をよく見せて話し掛けてください。話し手の口の動き、表情などが理解を助けます。黒板を向いたまま話すと、子供は先生の口の動きを読むことができません。大切な話をするときには特に注意してください。また、教材等を提示しながら話す際は、口元がかくれないように気を付けましょう。



(5) 指示等は短く順序立てて出してください。

聴覚に障害のある子供には、長くて複雑な指示は伝わりにくいです。できるだけ簡潔に順序立てて指示するようにしましょう。

また、大切な指示を出した後は必ず伝わったかどうか、確認するようにしましょう。



次の時間は、自習です。
一番目に、宿題の間違直しをしましょう。
二番目に、算数のプリントをしましょう。
三番目に、計算ドリルの5番をしましょう。
終わったら、好きな本を読みましょう。

(6) **自然なリズムで話をしてください。**

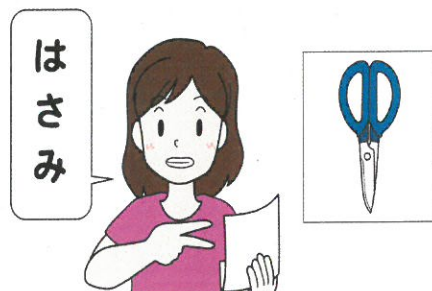
言葉のリズムを崩さずに、ゆっくりはっきり話してください。自然なリズムが崩れると、かえって話の内容が分かりにくくなります。子供がどうしても理解できないときは、2～3回繰り返します。



(7) **視覚情報を活用してください。**

きき取りづらかったり、読話が難しかったりするほか、語い不足や勘違いなどが理由で伝わりにくいときがあります。

話の内容に関係のある具体物や絵など視覚に訴える教材を使ったり、身振りを添えたりしましょう。



(8) **キーポイントになる言葉は文字で示してください。**

読話や聴き取りの助けになるように、キーポイントになる言葉は文字で示してください。何の話をしているかを明確にするだけでも、話の内容をつかみやすくなります。

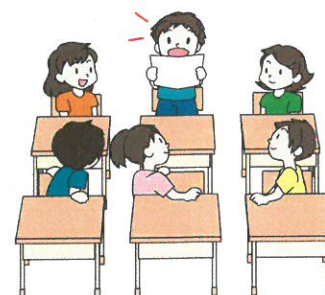
- 1 間違い直し
- 2 算数プリント
- 3 計算ドリル5



(9) **他の子どもの発表にも配慮してください。**

めいめいがバラバラに発表すると、何を話しているのかが分かりにくくなります。前に出て一人ずつ発表するか、発表する子供をしっかり見るように指示するようにしましょう。

また、発表内容が分かりにくかったり、発表者が多くなったりするときは、教師がまとめて話したり反復したりするようにしましょう。



(10) **補聴器や人工内耳は機械です。万能ではありません。**

補聴器は子供のきこえを補うものですが、完全には補えません。また、補聴器や人工内耳を着ければ、完全にきこえるというわけではありません。補聴器はききたい音だけでなく、周囲の雑音も大きくしてしまいます。また、言葉も若干ひずんだようにきこえます。そういう音や言葉に慣れるには、長期にわたる学習が必要なことを理解してください。

～学級担任にできる補聴器のチェック方法～

- 電池が切れていないか、時々確かめます。
 - 呼び掛けたときの反応や普段の様子に変化がないか。
- ピーと高い音(ハウリング)がしたら、そのことを本人に教えます。
 - 耳栓(イヤモールド)が、しっかりはまっていないときにきこえます



(11) たくさん話す子供になるよう励ましてください。

言葉のリズムを崩さずに自分の発音や会話の内容に自信がないために、人とのコミュニケーションにも消極的になりがちです。ぜひ何かその子の良いところを見つけ、励まし、ほめてあげてください。それによって自信が生まれ、間接的に言葉にも良い影響を与えられるでしょう。また、休み時間や放課後など雑談の相手をしたることで、その子のもつ言葉の広がりにもつながります。



また、分からないことをきき直したり、「書いてください」と伝えたりできるようにすることも大切です。

(12) 周りの子供たちの理解を深めてください。

聴覚に障害のある子供は、「耳がきこえにくい。言葉が伝わりにくい。」ということで、学校生活でも悩むことが多いようです。周りの子供たちの理解を深めて、居心地の良い学級をつくってあげてください。機会を見つけて保護者の方々にも話をしていただくと、より一層理解が深まるでしょう。

～理解してもらうために伝えること～

- ・ 補聴器や人工内耳は、大切なものであり壊れやすいものであること。
- ・ みんなと同じようにはきこえないこと、一度ではきき取りにくいこと、きき間違ふことがあることなど。
- ・ 自分自身の声がきこえにくいことから、正しい発音が定着しにくいということ。
- ・ 口元を見せて話すことや短めにゆっくり話すこと、伝わらないときは身振りを付けたり書いて伝えたりすることなど。
- ・ きこえにくかったり分かっていなかったりするときは、近くにいる子供に援助して欲しいということ。



(13) 保護者と連携をとってください。

保護者の方は学校でのことをとても心配しています。特に学習面はどうしても遅れがちです。家庭学習が欠かせません。子供を最大限に伸ばすためにも、家庭の協力を求めてください。

授業参観や個人面談の機会を確保したり、連絡帳等を活用したりして、子供の学習状況等を伝えるようにしましょう。



聴覚障害児の行動特性

聴覚に障害のある子供たちは、耳から入る情報が制限されるために、さまざまな場面で周りの子供たちと同じように行動できないことがあります。個々により実態は異なりますが、おおむね以下のような行動の特性が見られることがあります。

(1) 周りを見て同じように行動することはできるが、行動の意味が分かっていない。

〔例〕 みんながどこかへ移動しているので、
とりあえず自分もついて行くが、どこに
行くのか、何をするのかは分かっていない。



(2) 話が分からないのに聞き返せず、適当に返事をしたりうなづいたりしてしまう。

〔例〕 「分かった？」と聞かれると、つ
うなづいてしまうが、本当は何を言っ
ているのか分かっていない。



(3) コミュニケーションに自信がもてず、人とのかかわりを避けようとする。

〔例〕 会話が必要な遊びになると、
仲間からはずれることが多い。



(4) 友達の言葉を誤って受け取ったり、相手に伝わりにくかったりするために、 トラブルが多い。

〔例〕 みんなで決めたルールを
本人だけ分かっていない。



(5) 音に関するマナーの定着が難しい。

〔例〕 自分が立てている音に気が付きにくい
ため、足音が大きかったり、大きな音を立てて物を
扱ったりする。

